

た現在の営農状況からみても水田はかなり重要な位置を占めていることがわかる。条里の遺構が残っている点からみても古くからの米の産地であったことがいえる。

農業用水からみた地域性

農業用水は水田地帯においては最も重要な生産手段であり、昔から数多くの紛争がその使用の利害関係を反映して起っていた。一般に排他的で地域的対立が大きく、非合理的な慣習が通用するといわれている農業用水の特性が、古くからの水田地帯である熊谷地域の農業の中でどのように表れたかを合口問題を中心に調査した。しかし合口問題に関しては熊谷の大里用水に含まれている六堰間で、地域的対立という用水の一般的性格の現れをみることはできなかった。つまり、この地域は農業用水の性質としては日本の他の地域の場合と比べて、かなり特殊なものであるということができる。

地域的対立が少なかったということは、荒川の性質によって昔から水量の変化が大きく洪水や旱ばつがしばしば起った。このことは荒川から取水している六堰の特定の地域に常に利益または損害を与えるというものでなくこうした自然災害に際しては、全ての堰が共通の悩みをもっており、地域的な不平等が顕著でなかったこと、歴史的にみて、江戸時代における支配関係者の相違により、最下流の堰がかなり有利に水を得られる条件にあったことなど昔から地域的対立を激化させることが少なく現在に至った。これが合口問題の成立した大正末～昭和初期の時代に、河川水利の調整が奨励され、国の補助制度が法制化されるほどの水利行政の要求に支えられるなど諸々の条件が有利に作用し合い、水田の維持管理に多大の関心を払う重要な水田地帯の性格が、用水問題の解決を促進したと考えられる。

都市化地域の地域性

— 鴻巣市と北本町を例にとって —

宮崎 由利子

はじめに

調査地域の設定にあたっては、どの地域でも地理学的対象となることから、自分の都市化に対する興味とフィールドへの距離を考慮し、さらに地形的に多少とも変化をもった地域として鴻巣市と北本町を選んだ。そしてこの都市化地域の地域性を出来る限り究明することを調査目標とした。

調査地域は、ほぼ埼玉県の北東部に位置し東京を中心とする50 kmの圏

内にある。両市、町の中央を国鉄高崎線と国道17号線(中山道)が縦断している。鴻巣市は、面積35.51km²、人口32,426(昭和36年)、北本町は、面積19.63km²、人口15,793(昭和36年)の町である。

調査地域の自然環境

I 地形

調査地域は、大宮台地の北部と荒川及び元荒川の沖積地からなり、北本町は沼ど台地の上であり、鴻巣市は台地の北端と元荒川及び荒川の沖積地からなっている。

台地は西に高く東へだんだん低くなっており、台地の西縁は沖積面に対してやや急な斜面をなしているのに対し、東縁、北縁は漸次沖積面に移行し、その境が不明瞭である。

この地域を地形分類によって、上位台地、下位台地、自然堤防、沖積低地そして排水不良地の5つの凡例に分けた。

II 地質

大宮台地の南部は貝塚爽平氏によって、下末吉面に相当するとされているが、調査地域は、地形学的にも地質学的にもはっきりした事が知られておらず、又、適当な露頭もみられないので、地質はボーリング資料によることにした。

深さ25m以上では、主体は砂、砂質粘土、*primary loam, secondary loam*となっているので、現在の台地を作っているものは、海岸平野ないしは河川の下流の氾濫原の堆積物と考えられる。これがロームをかぶって台地化している。

III 気候

表日本式の気候で、北西の風が卓越することが特色であり、防風林の立派なものが多い。

人文環境

鴻巣市、北本町とも古来中山道の宿駅(又は宿場町)として栄えた共通の歴史性をもっている。鴻巣市は、江戸時代後期より^雑雑人形の町として知られ、関東三大雑市の随一と称せられ、雑人形は広く海外にも輸出された。しかし第2次大戦後は著しく衰え、昭和29年の1町5ヶ村の町村合併による市制施行以来、工場招致に商業発展にそして市街整備に力を入れている。

一方、北本町は、江戸時代に於て、今の町の中心である北本宿が宿駅として栄え、慶長年間に宿駅を鴻巣市に移したが、宿場として長く近郷に知られていた。昭和18年、石戸村と中丸村が合併して、あらたに北本宿村となり、

昭和34年、町制を施行し、北本宿村の名称を、北本町と改めて現在に至っている。

鴻巣市、北本町とも農業就業者人口が全産業就業者人口のそれぞれ37%、57%を占めている点で、この地域では農業が主体となっているが、通勤者の増加や工場誘致の進展によって、農業の比重はだんだん小さくなっている状態である。ちなみに鴻巣市の産業別市民所得に於て、工業のそれが30.3%と、19.1%の農業を上回っている。

一戸当耕地面積は、鴻巣市では1町/畝、北本町では、9反2畝（両者とも35年の統計）であり、主要農作物として、前者には、水稻、陸稻、大豆、甘藷、小麦、野菜があり、後者には、陸稻、大麦、小麦、水稻、野菜、花卉がある。

一方、工業としては、鴻巣市の郡是製糸K.K鴻巣工場による繊維工業が主なものであり、他は誘致された工場にして中小規模のものが殆どである（現在の段階に於いて）。

調査地域の地域性

調査地域の概観によって、次のような特色を知り得た。

(1) 桑園が減少している段階にある

この地域は、地理的 位置から埼玉県南部及び東京都への通勤地域となりにかけていることから、農業の労働力が次第に減ってきており、

手間のかかる養蚕は兼業農家としてやっていくことが困難であるので桑園が減少し、その代りにある程度機械化を取入れて手間のかからないしかも収益の安定している陸田の経営や、都市向けの花弁、野菜、果樹の栽培がふえていく傾向にある。又、桑園は、工場用地にも変化している。

(2) 都市化による農業の経営形態の変化が畜産や蔬菜、果樹栽培には着しく現われず、通勤の増加による労働力の不足を解消出来る陸田の増加に現われていて、副次的なものとして花卉栽培があること。

蔬菜及び果樹栽培は、将来だんだん増加していくことが予想されるが、現在は一般に小規模である。

(3) 工場誘致、都市計画が進展し始めていること。

この地域は、高崎線及び国道17号線が町の中央を縦断し、県南及び東京都への通勤地域として、又、工業、農産等の生産都市として飛躍的な発展を期待される地域であり、工場誘致については、雑木林の多い北本町が今後の進展に有利となるであろう。（現在のところ、調査地域に誘致された工場は

中小工場が殆どである。広い空地が少ない為である。)都市計画を見ると、都市計画街路の工事が始められていて、その一つ大宮パイパス(大宮-鴻巣間)が完成し、37年の5月に正式に開通した。

今後はさらに区画整理による宅地造成や、工場誘致に伴う工場団地の造成の計画も実施され、将来は衛星都市に迄発展することが予想される。

埼玉県東南部低湿地の土地利用

— 埼玉県越谷市の場合 —

船 越 浩 子

調査地域は、埼玉県東南部の利根川、荒川の造る沖積平野に在る人口51,389人(昭和36年4月現在)面積60.39 km²の越谷市。東京都心から約25 kmの地点にあり、東武鉄道利用で浅草から40分程度のところにある。元荒川が西北から東南に向って貫流、東部を古利根川が、南部を綾瀬川が流れ、多くの用排水路が走っている。平坦な水田地帯が広がり、交通上の幹線となる東武鉄道、四号国道が市内を縦走し、それらに沿って市街が形成されている。近年、東京を中心とする既成工業地帯の用地的、用水的飽和状態のため、埼玉県内への工場進出は著しく、越谷市への進出工場数も、昭和34年頃を境に急増し始めた。東京に近い南部及び主要交通路に沿って都市化が進みつつあり、農村の土地利用もこうした新しい因子の導入で変わりつつある。

1. 越谷市は、河川の運搬した砂、粘土が堆積した平均海拔高度5.2mという沖積低地で、この沖積地の微地形分類は、低地(後背湿地、旧河道、現河道)と微高地(自然堤防、人工盛土地)とした。自然堤防は少々高く(低地との比高約0.5~2m)乾燥し砂質で、現在は、主に畑に利用され、集落や街道筋の立地となっている。人工盛土地は、進出して来る工場が水田地域に工場立地に適するよう盛土をするものである。後背湿地は、粘土質で、主に水田に利用されているが、この湿地には、沼沢植物遺体の堆積した低位泥炭地が広く分布し、土壌条件は悪く、米の反当収穫量は低い。一方この地域は、古来、河川の氾濫で知られ、このことは地域開発の中心問題であった。江戸時代に江戸の後背地の開発、洪水防禦を目的とした諸河川の付替工事、改修工事が行われ、用排水系統も確立された。明治以後、現在に至るまで、土地改良が進められていて、不良土地条件は、階層の如何を問わず、かなり克服され、このことは、農業への畜力、機械力の導入及び湿田の乾田化による裏作を可能にした。現在、農用地の約3%が水